



死生懇話会委員によるリレートークイベント（第1弾）

「生きづらさ」をつくっているのは何（誰）なのか？

日 時：2022年7月30日（土）

14時00分～15時35分

会 場：オンライン開催

人間にとっていつの時代も共通で、永遠の課題である「生」と「死」。滋賀県で2020年度より開催してきた「死生懇話会」の中では、今の時代の「生きづらさ」についての議論が交わされてきました。

今回は、「生きづらさ」をテーマに「死生懇話会」委員によるトークイベントを行い、出演者の経験談も踏まえた自由なトークから、今を生きるヒントを探ります。

【出演者】

藤井 美和 さん（死生懇話会委員）

関西学院大学人間福祉学部人間科学科 教授（死生学研究者）

ミウラ ユウ さん（死生懇話会委員）

NPO法人 好きと生きる 理事

一般社団法人こどもエンターテインメント 代表理事

上田 洋平 さん（死生懇話会ファシリテーター）

滋賀県立大学地域共生センター講師

[14時00分 開会]

○事務局(滋賀県企画調整課 山田)

大変お待たせいたしました。それでは、お時間になりましたので、「死生懇話会委員によるリレートークイベント(第1弾)『生きづらさ』をつくっているのは何(誰)なのか?」を開催いたします。

私は、滋賀県企画調整課の山田です。どうぞよろしくお願いいたします。

このイベントは、滋賀県で取り組んでおります死生懇話会の関連企画として開催させていただくものです。「死ぬ」「生きる」と書いて「死生懇話会」ですが、これは誰もが避けられない「死」と向き合い、そこからより豊かに生きるヒントを得ようと。また、こういった根源的なテーマについて多くの方が考え、語る場を得よう、機会をつくろうと、様々な立場の方々にご参加いただきながら公開で議論しているものです。

これまで死生懇話会を3回開催してまいりましたが、行政の中で「死」を取り上げて議論しようという取組は珍しく、初回の開催時よりメディア等で異例の取組として取り上げていただいているところです。滋賀県ホームページから過去の死生懇話会の動画を視聴いただくこともできますので、よろしければご視聴いただければと思います。

これまで3回開催しました死生懇話会は、6名の委員の方々に入っただき、そこに滋賀県知事も出席して行ってまいりましたが、どうしても、時間の関係上、委員の皆様にお話しいただける時間に限りがあり、ご聴講の皆様からも委員様のお一人お一人のお話をもう少し聞きたいといったお声

をいただいております。また、死生懇話会の中で度々議論されてきた「今の時代の生きづらさ」について、聴講者の方々からも多数のご感想をいただけてきたところです。今回は、そういったお声を参考に、死生懇話会委員の中でお仕事やご活動の関係性が深い委員様をお招きし、『『生きづらさ』をつくっているのは何(誰)なのか?』テーマに、オンラインでのトークイベントを企画したところです。

本日は、死生懇話会委員の関西学院大学人間福祉学部人間科学科教授の藤井美和さん、NPO法人 好きと生きる 理事のミウラ ユウさん、さらに死生懇話会でもファシリテーターを務めていただいております滋賀県立大学地域共生センターの上田洋平さんにご参加いただき、ご自身のご経験も踏まえた自由なトークをしていただこうと思っております。

最後に、視聴の際の注意点です。トークイベント中にご感想やご質問がある場合はZoomのチャット機能をご活用いただきますよう、お願いします。その際、宛先をホストやパネリストに限定するのではなく、全体を対象にチャットをしていただきますよう、お願いいたします。このイベントの後半に、お時間には限りがあるんですけれども、幾つか取り上げさせていただければと思っております。そのようによろしくお願いいたします。

では、ここからの進行を上田先生にお願いしたいと思います。上田先生、よろしくお願いいたします。

○上田 洋平さん



はい、よろしくお願ひいたします。聞こえておりますでしょうか。大丈夫ですか。

皆さん、改めまして、こんにちは。滋賀県立大学の上田でございます。

今日は、先ほど説明のありましたように、死生懇話会委員によるリレートークイベントの第1弾ということでお二人にお越しいただいております。

この懇話会は、これまで3回やってまいりました。それぞれ興味の尽きない話題、重要な観点を挙げていただきながら議論してきたところであります。そもそも懇話会ということでもありますので、その場その場で何かまとめをすとか、それをもって何か政策や施策につなげるというようなことは当面の目的とはしないで、いろいろな論点を出し合って皆で議論する場をつくっていきましょうというようなことで進めてまいりまして、県民の皆さん、あるいは視聴者の皆さんとともに稀有な議論の場がつくられてきているところかと思ひます。

その中でも特に、ご要望というか、ファンの方が多いいいますか、藤井さんとミウラさんのお二人については、ファシリテーターの私が下手くそなために毎回十分にお話し

いただく時間が取れなくて、もっともっと聞きたいなという声もたくさんいただひましたので、今日は自由に、少しゆっくりとお二人のお話を聞きながら進めていきたいと思ひます。例によって、簡単にまとめるということはせずに、いろいろな観点を学んでいくというようなことにしていきたいと思ひます。

それで、先ほども説明ありましたように、チャットでお二人への質問とかコメント、ご意見を受け付けております。それをまた拾ひながら議論を進めていくことも後半考えておりますので、皆様のチャットへのご投稿も歓迎いたします。よろしくお願ひをいたします。

今日の流れとかも振り返る意味でちょっとだけ。今日は、まずトークイベント第1弾として「『生きづらさ』をつくっているのは何(誰)なのか?」というテーマで進めていきたいと思ひます。この後、藤井さん、ミウラさんの順で、この生きづらさをつくっているのは何なのか、誰なのかというようなことに関して、少しゆっくりとというか、お話を二人からいただきまして、それを受けてまた互ひに議論をして、そして最後、みんなで議論をするというような形に持っていきたいと思ひます。

これはもう説明されたところですので飛ばします。

「『生きづらさ』をつくっているのは何(誰)なのか?」、そもそもこの問いについてお二人がどう思われるのかというようなことも聞いてみたいところですね。もちろん今日は「何なのか」「誰なのか」という犯人探しを目的とする会でもなく、そういうテーマでもないということではあります、この後、生き

づらさとは一体何なんだろう、なぜ私たちはそういう生きづらさを感じているのか、あるいは感じていると思っているのかについて、そのヒントをいただくということにしていきたいと思います。

これまでの3回の中でも、いろいろな観点から、この生きづらさに関わるようなご発言もいただいているところであります。自分の死生観や人間観の中からも自分自身の生きづらさ、社会の生きづらさがつくられてきているのではないかと、居場所というのが必要なんじゃないかと。その居場所というのは、単にどこかにある空間というだけじゃなくて、人と人との関わり、特に自分の存在を認めてくれるような人がいる、あるいは人同士でつくられる関係性、そういう居場所もテーマとして出てきたようなところであります。あるいは、我々はそもそも互いに迷惑をかけずに生きている人なんていないんだということですよ。そして「私が支えているんだ。支えてあげているんだ」という上下の関係ができると、また生きづらくなるのではないかと、さらに深いところでは、いろいろな苦しみとか、生きている意味があるのかという気持ちが湧き上がったり、あるいは親が亡くなったりしていく中で「どうして自分がこういう目に遭うのだろうか」とか、もっと深いところでは生きる根拠。「自分はなぜ生きているのか。なぜほかではなくて自分なのか。生きていていいんだろうか」というようなことを誰しも抱える、それにぶち当たる時があるけれども、なかなかそれを分かち合うことが社会の中でできていないんじゃないかと、そんなことも提起いただいていたところかなというふうに思います。

ミウラさんも、例えば多様性というようなことをわざわざ言わなくてはならないという社会に問題の一端が表れているんじゃないかということですね。この当たり前だと思われるような多様性について声を大にして言わなければならないような状況への提起でありますとか、子どもたちと向き合っておられる中で「消えたい」というような切実なメッセージを受け取られる。「これは一体どういうことなんだろう？」とか、あるいは社会の中でやっぱりどこか優劣をつける、そして優れたものをよしとするとか勝たなければならないとかですね。

ちょっとずれますが、SDGs なんかも、企業としゃべっていると、「SDGs を一生懸命やって我が社は勝ち抜いていくんだ」と。「誰一人取り残されない」と言っているのに「SDGs で勝ち抜く」みたいなね。そこまで勝つとか負けるという優生的な考え方というのが浸透しているんじゃないかみたいな提起とか、生まれてきてよかったと言えるときが特に大人も含めて我々はあるだろうかというような提起をいただいたところです。

この辺を踏まえて、今日さらに深く「生きづらさ」ということを考えていきたいと思いました。

それから、これはおまけです。この後すぐお話しいたしますが、この懇話会で、例えば『もうじゅうぶん生きた。これ以上長生きして子や孫に迷惑かけたくない。はやくあの世へ行きたい』と年老いた親が言うんだけど、どう声をかけたらいんだろうか」と、こういう声を視聴者の皆さんからいただいて、みんなで議論してたところですよね。

それから、「長寿の迷惑化」なんて言葉を

考えたりしたんですが、まさにそういう議論をしたことが、自慢じゃないんですが、最近、カンヌ国際映画祭「ある視点」部門でカメラドールを取った『PLAN75』という映画——今、全国でロードショーされているようですが、75歳以上が生死を選択できるプランなんていう想定映画が注目をされている。まさにこの懇話会のテーマが、あるいは懇話会がそういう流れを先取りしている部分もあるかな、なんてことをちょっと思ったりする次第です。

今日はこういう議論を踏まえながら自由に討論をしていきたいなというふうに思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、生きづらさとは何だろうか、あるいは生きづらさをつくっているのは何(誰)なのかと問うことについてどうなのかみたいなことも含めて、まず藤井先生から少しスピーチをいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○藤井 美和さん



はい、ありがとうございます。

今日は、このような機会をいただきましたこと、感謝しています。20分ほどお時間をいただいていますので、その中で語れる範囲でお話させていただきます。

まず、第1回の死生懇話会でもお話しいたしましたように、「きっとこういう人は幸せだよ」とか「こんなふうになっていくのがいいことだよ」という社会全体がもっている考え、これが社会的な価値観です。つまり「社会の価値観」というのは個人の価値観の集まったもの、社会の多数派の考え方。「社会」という人はいませんから、結局は個人の価値観の表れが社会全体に広がっているということになります。そういう意味では、「生きづらい人と生きづらくさせている社会がある」というよりは、「生きづらい人と生きづらい社会をつくっている人たち」ということになると思うんですね。

では、「生きづらさを感じる人」と「生きづらさを背負わせている人」というのは二項対立かということ、私はそうじゃないと思っています。生きづらさを感じる人も誰かの生きづらさをつくっているということもあると思うんですね。

つまり、うまく言えるかどうか分からないんですけども、私たちの心の中には「何かできることがいいことだ」とか「人の役に立ちたい」という素朴な思いがありますよね。特に若い人の教育に関わっていると、人の役に立って自分自身の喜びにしたいという人は山ほどいます。それがダメということはないです。ただ、人の役に立つことで自分の存在意義があるという思いは、逆に役に立たない人を見ると(実際役に立っていないかどうか分からないにもかかわらず)、「この人は人の役に立てないかわいそうな人だ。私は人の役に立つ人間だから、何かして助けてあげなくちゃ」という思考になってしまう。そうすると「人の役に立とう」とい

う純粋な思いが、ある意味、人に生きづらさを与えてしまうことにつながる、そういうことが起こってくると思います。

ですから、生きづらさを感じる人、生きづらさをつくっている社会あるいは生きづらさをつくっている私たちというふうな二項対立の形ではなくて、私たち人間の中には小さくても優生思想的な思いがあって、そういったものが何かしら分からない形でメッセージとして発信されているのがこの社会だと、そのように私は考えています。

先ほど上田先生が「犯人探しをするわけじゃない」とおっしゃいましたけれども、まさにそのとおりで、誰が犯人というのではなく、これはもう全ての人の課題だと思うんですね。子どもに対して「こうするのが幸せだよ」と言うのも、その人は、それがよいと思って言っているのですが、しかし、「こうあるべきだ」というある一つの形が人を苦しめていますし、高齢者に対して「もっと自立してよ」とか「そんなことも分からなくなっちゃったの？」と言うのもやっぱり——今、サクセスフル・エイジングと言うんですか、「元気で健康な人がいいお年寄りだ」みたいなものができてしまっていて、そこから外れるとダメとなる。ですから「生きづらさ」について、なぜそれが起こるのかを語るとき、社会も自分も区別できないのではないかと私は考えています。そういう意味では、私たちは何をもって「生きる」というのか、それをもう一度考えるときに来ているのではないかと思うのです。

「生きづらさ」に対する考え方として、私が一つ思うのは「ありのまま」だと思うんですね。ありのままで在るということを認めら

れるかどうかということです。ありのままというのは、何かができるということでもないし、生産性が高いとか効率性がいいということでもなく、それと関係なく、「そこに在ること」ですよ。でも、ありのままを認めるというのはものすごく難しいことだと思います。

なぜなら、私たちは生まれてずっと、科学的合理性や効率性をよしとする環境の中で教育を受けているからです。どこまで行っても競争。幼稚園のときからもう競争は始まり、小、中、高、大学、就職。就職活動でも、ゼミ生を見ていると、就職試験に落ちると、人間性が否定されたかのごとく、へこんじゃうんですね。「自分はもう無価値な人間だ」ってところまで行っちゃうんです。この競争社会の中で、どこに目を向けたら「ありのまま」というのが出てくるのか。そこには、「ありのままでオーケー」ということを認めていくことができる私であって、私たちであって、社会であることが必要になってくる、そう思います。

その中で重要なのは、一つは関係性だと思います。子どもも大人も高齢者もみんなそうですけれども、私たちは「ありのままオーケー」という価値観というか関係性をどうしたら持てるのかということだと思います。恐らく、ミウラさんはそういうことを一所懸命されておられると思うんですね。

「ありのまま」を認めることの難しさというのは、先ほども言ったように、「これじゃあダメだよ。ありのままを認めないといけないね」と頭ではわかっているけど、やっぱり心のどこかで、「ありのまま」を認められない自分がいることに気づく、そのしんどさというものもあると思います。

あとは、「ありのまま」ということが「何も持たないこと」という理解にはなっていないで、「その人らしさ」になっていることが多いと思うんですね。「ありのまま」と「その人らしさ」は違うと思うんです。「私はこんな活動をして、こんなふうに笑って、こんなふうに生きているのが私らしさ」、そう思っていると、例えば病気になったり、経済的に破綻したり、環境ががらりと変わってしまうと、私らしさというのは保てなくなりますよね。そうすると、「自分はダメだ」となってしまう。ですから、私らしさ、あなたらしさは大切だけれど、それが本当に無条件のあなたらしさ、そこに在るだけでオーケーのあなたらしさなのか、私らしさなのかというと、今の世界ではクエスチョンマークです。「あなたらしく頑張りなさい」と言ったときのあなたらしさとは一体何なのかなと思ったりいたします。

そこで、学生とのやり取りを一つ。これは許可をもらって紹介させていただきますが、ある学生は、こんなことを言っています。「自分は人間として、人に頼られているというところに自分の存在価値がある。だから人間関係というのはすごく大切。自分を認めてくれる人がいることもすごく大切。私は、高校時代はクラスの中で、友達だけではなく、友達のお母さんにも頼りにされる存在で、みんなの役に立つ人間だと思っていました。ところが、あることがあって——このあることというのは、自分がいろいろ相談に乗ってあげている子と好きな人がかぶったということなんですよ——そこで急に友達みんなから無視されるようになりました。人間関係なんて、はかないものだと思った。死にたいと思いました」。

自分が役に立っている、よい人間関係を持っていると思っても、その関係性は永遠かというところには利害関係の中で認められている関係性ということもあるということです。「いい子」だったら親や先生に気に入られるけど、何かで踏み外すと、もう「悪い子」とされてしまう。これも「ありのまま」じゃないということだと思えますよね。

また、こういう学生もいましたね。「生きる苦しみから解放されるには、生きる意味を見いだす必要がある。そのためには誰かに必要とされていると感じて生きることが大切だ。例えば、やりがいのある仕事に就くことができれば、人々の役に立っていると感じられる。そのため、私は大学生の間にたくさんの方のことを学んで、素晴らしい職業に就き、人々のために働きたいと考える。また、どんなことでも相談し合える友人がいれば、必要とされていると感じられる。そのため、関わりのある友人を大切にしていきたい」と。そういう人間関係が大切だと言っている学生もいます。

でも、先ほど言ったように、いい職業に就いて人のために働くとか、友達を大切にしたいということ、それは本当に重要なことだと思うんですけども、それが全てだとなってしまうと、先ほどのように何かの拍子で人間関係が崩れたら「もう死にたい」となる、それは往々にして起こっていることだと思います。

私は、自分も人も、社会の構成員一人一人が、「ありのままを受け入れていくとはどういうことなんだろう」とちょっとでも考えていく、それが生きづらさに関わっていくことだと思います。言い換えると、目の前の人を

心から愛せるか、ということだと思っ
ね。こう言うちょっと仰々しいかもし
いですが、目の前の人、そこに在る
人のことが何か気になる、というよ
です。「ああ、もうしょうがないよ
は」じゃなくて、何かこの人のこと
かるとか。「私は人を助けられる人
その人に何かしてあげましょう」じ
そう、援助関係とかではなく、「こ
が気になる」という存在になれる
それが重要なのではと。そう思
抽象的ですが、目の前の人を心か
愛する、許す、ということになっ
思っ

そんな抽象的なことより、もっと
ことだ大切だと思われ方もあり
ません。でも私たちは、実際の因果
「こうしてあげたらこうなるだ
ころにとらわれ過ぎていて、いつ
したら、こういう結果が得られ
機から行動していることが多い
すね。これもやっぱり合理性だ
「何かをやったら、結果こう
いう合理的な考えで動くから、
アプローチしたから、この子
私って、やっぱりすごい」とな
逆に、例えば高齢の方に関わ
私はこんなに一生懸命している
は『ありがとう』も言ってくれ
ダメだわ」と落ち込んだり…。
自分の行動や実践の結果によ
そ自分の存在価値を測っている
かと思ったりもします。さっき
したけど、人間は人を丸ごと受
はできないにしても、結果を度

こに、その人に、心を寄せるとい
きるか…それが大切なことだと思

そしてもう一つ、目に見えない
いうのも「生きづらさ」を考
ことだと思っ。見えない関係性
は、例えば大自然とか宇宙とか
なるものとか、そういった合理
超えたところにあるものとの
これが実はすごく大切ではない
ただ、それについては教育の中
切り離されてしまっ
ているので、どこまで行っても
合理的な考え方、「こうすれば
よくなる」とか「なぜこの苦
しみは起こるのか」、「これ
がなかったらいいんじゃないか
」という足し算引き算、「A
ならばB」みたいなのが出て
きてしまっ
と思っ

これもまた学生ですが、「生きづ
らさ」の話でこんな言葉を語
っていました。「過去に自分
がどうしようもなく無能に思
えて、ここから消えてなくな
りたいと思ったことがあり、
自分で自分を終わらせよう
と考えたことがありました。し
かし、こういった考えから抜
け出したときがあった。それ
は1人で旅をしたときである
。誰も自分のことを知らない
場所に行ってみたく思っ
た結果、1人旅することを選
んだ。大自然に触れ、現地
の人との会話で、今まで全
く知らなかった人たちの生
きざま、宗教や信仰、素朴
に自然と生きる姿、そこ
から私の悩みは不思議と解
消されていった」と。そう
いうことがあるので

これは、人間関係、今の社会
から抜け出たとき、これまで
の関係性を超えたもの、自然
や大いなるものとの出会い
がこれまでの世界と違うもの
を見せてくれた、ということ

です。自然はやっぱり、ありのままの人間としか関わらないですね。自然は、何かしてくれる人を大切に思うわけでもないですよ。そういう意味では、無条件に在ることを(ありのまま)を認めてくれるものとしての大いなる自然や、何か分からないけれども命を与えてくれた大いなるもの——これは私の専門領域の死生学ではサムシング・グレートとかハイヤー・パワーと言うんですけれども——それが、いわゆる人間が「こうだよ、ああだよ」と言うものを全く超えて、そんなこととは全く違う次元から、「あなたは大丈夫」、「あなたはそのままオーケー」というメッセージを送ってくれるのだと思うんですね。これが合理性や生産性から生まれる苦しみから解放してくれるということだと思います。この世的な合理主義を超えて生を考えることは、哲学や宗教がずっと考えてきたことです。ところが、先ほども言いましたように、今は哲学とか宗教とか、あるいは自然や宇宙から自分が何を受け取るか——今はマインドフルネスみたいなものもあるみたいですが——そういったことは、科学が優先されちゃうので端っこに追いやられてしまっています。自分が生かされているという感覚、そういったものが減っている。自分が生きている、幸せに生きるにはどうしたらよいか、ということがフォーカスされて、生かされている、とか、命を受け取るという姿勢がなくなってきたように見えます。それはもう、苦しむ人もその周りにいる人もみんな同じだと思います。

大病した人が奇跡的に回復したときや、遭難した冒険家が無事に帰ってきたときのインタビューで、「私はまだすべきことがあ

るから、もう一回命を与えられたんだと思います」とか「私は、また生かされたんだと思います」という言葉を聞くことがあると思いますが、そもそも誰かが「あなたに命をもう一回与えてあげますよ」と言ったわけでもないですし、友達や家族に「生きなさい」といわれたから生還したわけでもないですよ。つまり、人間が生きているということには、この世の関係性を超えた視点、つまり「いのちがどこから来て、どこへ行くのか」という視点が必要です。そのような視点が、生きるときを考えると重要になってくると思います。

とはいえ、命も今は、人工的につくることのできるようになってきました。おなかの中の胎児に障害があったら「要らない」ということも言えるになってきましたし、先ほど上田先生がおっしゃった『PLAN75』のように、近い将来、「75歳になったら、どうぞ死んでもいいですよ、安らかな死をお手伝いしますよ」という制度ができるかもしれません。結局、私たちは生まれる前から、そして、生まれて死ぬまで、ずっと選択の世界で生きていて、その選択の根拠になるのが「何ができるか」という生産性だったり、効率性というものだと思うんですね。これはお腹の中の子どもから、大人、高齢者まで、そして死ぬまでずっと続いています。今見ている、今いる世界から、穴を開けて外の世界を覗いてみる、合理的な人間界を超える世界、神秘や超越した世界を見ていかないと、人間が人間をコントロールする中で生きる限り、「生きづらさ」を感じない人はいないと思います。みんな生きづらいと思います。ですから先ほど言いましたように、「ありのまま」というものを見たときに、見える関係性も見

えない関係性も全部含めて、私たちは「存在している」ということの受け取り直し、というのが必要なのではないかと思います。

大枠のお話をさせていただきましたけれども、時間が来ましたので、ここで止めておきたいと思います。

○上田 洋平さん

藤井さん、ありがとうございます。慣例により「さん」付けで呼ばさせていただきます。

幾つもの重要な観点、あるいはこれまでの議論を振り返っての観点を出していただきました。特に、一つの重要なキーワードとして「ありのまま」というような言葉を出していただいたところでありますね。ありのままであること、これを認めるということも実は難しいことかなと。お聞きしながら、「ありのままを認められない私」というこの「ありのまま」をどうしたらいいのかというようなこともちょっと考えてしまいました。

あと、言葉としては「この人のことが気になる」というような関係性が大事だと。何かしてあげるとかじゃなくて、何だか気になる、ついつい目が行ってしまうとか、そういう関係性。

あるいは、実際的な科学的・合理的な因果関係。あるいは、道具的な関係といえますか、使い物になるのかどうか、役に立つのかどうか。社会の中で一人一人が道具みたいなものになってしまって、そういう合理的な因果関係、「こうしたらこうなる。こういうふうな役に立つ」というような因果関係、道具的な関係。それに対して、サムシング・グレートあるいは自然というようなものとの合理性を超えた関わりとか、歴史の中での、

時間の中での個人の存在を超えたつながり、命のつながりというようなものをもう一度どう考えるかというようなときに来ているんじゃないかと。

それから、僕が「あっ、なるほど」と思ったのは、旅することで回復していった人がいたということですが、これは、逆に言うと、がんじがらめの関係性の中から一旦、無名といますか、ある種の孤独なところへ身を置いて、そして新たに自分を結び直していくとか、個とか、孤独ですね。一方で、誰かと寄り添っていたい、同調していたい、一緒にいたいということだけではなくて、むしろ安心して孤独でいられるとか、あるいはあえて個というものに身を置いてみるというような余裕とか、機会というのが重要なんじゃないかということを僕は改めて感じましたね。

それから、もう一つ、『PLAN75』もそうですが、まさに「選択、選択、選択」あるいは「選別、選別、選別」「査定、査定、査定」という中で生きているということですよ。この基準は誰がつくるのか、何がつくっているのか。むしろ、そこにもう一度穴を開ける。みんなそこにいると気づかないけれども、少しそこに穴を開けていく。ひょっとしたら、子どもたちとか新しい人たちはそういう穴を開けて次の世界を垣間見せてくれている存在なのかもしれません。まあ、そんなことも含めて。

そして、我々は存在していることを受入れ直しを社会でもう一度問い直してみたいという、こういうメッセージ。まさにこれは、死生懇話会でこれまで3回、そして今日も含めて皆さんと問いかけ、問い直してきた

テーマをもう一度思い返させてください
いると思います。

そうしましたら、今の藤井さんのお話も受
けて、ミウラさんのほうに、感想も含めて、
同じように生きづらさというようなことに関
してお話をいただきたいなと思います。よろ
しくお願いします。

○ミウラ ユウさん



こんにちは。NPO法人 好きと生きるの
理事をしておりますミウラと申します。どう
ぞよろしくお願いいたします。

今、藤井さんのお話をすっかり一聴講生
として聞き入ってしまって自分の原稿が全
く飛んで、何から話そうかなという状態に
なっています(笑)。

「皆さん、いかがお過ごしですか」という
感じなんですけど、本当に気候も厳しくて、
次々に今まで体験したことのないような事
件や事故が起きて、毎日のニュースを受け
入れていくというか、受け止めるだけで
もすごく精神が厳しい状態なんじゃないかな
と思います。一つ何か行動しようと思っても、
何か困ることがまた起きてうまくいかなか
ったりとか。要するに、スムーズに生活でき
ないというか、そういうことが続いておられる

んじゃないかなと思います。恐らく、今この
死生懇話会を聞きに来てくださっている皆
さんは、「楽勝！」「生活、全然大丈夫！」な
んて人はいないと思うんですよ。私も同じ
なんですけど、きっとすごくしんどい日々な
んじゃないかと思っております。

じゃあ、それを想像して、実際私がお一
人お一人に手を差し伸べることができるか
といたら、そういうこともできず、しんどか
ったら話し合おうとか、話そうみたいな
ことぐらいしかできない毎日なんですけど、
そうやって小さな助け合いとか、肩の
貸し合いみたいなことを何とかみんな地べ
たのほうで手をつなぎ合って耐えていると
いう、今そういう状況がすごく私には見えて
います。

そんな中で、先ほど藤井さんや上田さん
のお話の中にあつたように、生まれてきて、
いろんなことで選択や選別や精査を受けて
勝ち抜いていかないと駄目みたいなことっ
て、どうしてそんなふうになっちゃったのか
など。「生きづらさはどこから来るんでしょ
う？」とか「誰のせいでしょう？」という問い
に対して、いろいろと覚めることはあっても、
思うことはあっても、これだなという答えが
私にはどうしても見つけられなくて、生きる
ことそのもの、命に対することそのものにも
正解がない中で「どんな価値観で、どんな
ふう生きていて、何がよしとされるのか」
みたいなことは千差万別で当たり前である
はずなのに、やっぱりどうしても基準を決め
にかかりたいとか、「こうだったら大体
安全ですよ」とか「こうだったら大体いいラ
インですよ」みたいなのがどうしても社会的
に出来上がってきてしまうと思うんですよ。

でも、やっぱり私はそこに抵抗して「いや、答えはもしかしたら死んでも見つからないかもしれないけど、自分で思うことを自分で探していきたい」と。そして、自分で探すときの材料として誰かのアドバイスを聞いたり、みんながどうしているのかを見たり、広い視野を持って、自分以外の人があるような生き方をしているかとか、また、世界に目を向けて、日本ではない国ではどんなふうな習慣があるだろうかとか、そういうことを感じたり、知ったり、考えたりしながら生きづらさに向き合っていきたいというふうに私は思うんですね。

それで、このところちょっと感じることで、優生思想というか、優生保護法という法律が日本にはあったんですけど、それは1948年に制定されて1996年までの間、わずか26年ぐらい前まで実在した法律です。それはどういうことかという、すごく簡単に言うので言葉に間違いがあったら申し訳ないんですけど、障害を持った人が生まれなくするための、障害の遺伝子を引き継がなくするための手だては何だって打っていいですよという法律だったと私は解釈しています。というのは、強制不妊もオーケーですし、不妊手術をしても構わない、障害者が妊娠してしまった場合は中絶しても構いません、それは受胎調節をしても構いません、そういうことを法律で決めていたという時代がありました。それは何かというと、不足のある人間をつくらないということなんです。先ほどから「役に立つ」というキーワードがよく出てきていると思うんですけど、ある程度社会の一員として役に立つ、例えば立派な納税者になってくれるような人たち

をつくっていく、それに沿わない人たちは排除していくという考え方だったと思います。

でも、それはやっぱりよくないということに気がついて26年前にその法律を廃止にはしているんですけど、でも、結局、そのときからDNA的に私たちが受け継いでいる思想の中に「優れているもののほうがいい」という考え方を残しちゃっていると思うんですね。一見、優生思想は消えたように見えて、みんなが口にしなくなったけれども、でも頭の中には残っていたり、心の中に残っていたりして、差別してやろうとか、そういう気持ちがなくても、自然に「優か劣かで言うと、優のほうがいいに決まっている」となってしまうような気がするんです。

それが今、優生保護法が進化したというか、スーパー化した状態で、新しいことがじゃんじゃんできちゃう超人的な人が出てきたり、つい最近まで隣のお兄ちゃんみたいだった人が世界でぐわーっと活躍する人になったり、新しいプラットフォームをつくったり、そういうのを見せつけられると、みんなぎわぎわってなって、「何かできない自分は駄目なんだ」とか「できなくちゃいけない」とか、それこそ「活躍して人の役に立たないと駄目なんだ」みたいな気持ちにすごくさせられるというのが今の状況なんじゃないかなというふうに思います。

まず生まれてきたことに価値があって、存在そのものに意味があるというふうに捉えてもらえない。存在するだけでは駄目で、何かができないと駄目で、さらに優れていないと駄目みたいなことを言われる。社会や世界の状況は、戦争が起きたり、こうやってコロナがいつまでも収束できなかつたり、

公然と人前で元首相が殺されたりする。そんなものをずっと見せられながら、そんな状況の中に身を置きながら、「優れていないと駄目」って、それは無理ゲーでしかないというか、もうほとんどの人ができないと思うんですよね。でも、それを「できなくていいよ」と言ってくれる社会でもない。やっぱり「できないと駄目」という圧力のほうが強いと思うんですよね。そこに対してどうしていけばいいのかなと。私も、具体的な策、「だったら、どうしたらいいの?」という話になると、正直言って、「これをやれば、そんなの一笑解消できますよ」みたいなことを出せないのが本当に悔しいんですけど、ただ、私は、やっぱり大きな声で、多様性などを叫ぶのではなくて、「あなたは生きていてそれでいい」ということを言いたいと思うんですよ。存在そのものがすばらしいと。何かができないと駄目なんてことは後づけの話であって、人間というのは、生きて生まれてくること、そこに価値や意味があるんじゃないかなと思ってます。

ちょっと話がずれるんですけど、昨日、息子と仮面ライダーの映画を見に行きました。私たち、親子で特撮とかヒーロー物が大好きなんです。息子はもう17歳なので、仮面ライダーを見に行くような年齢ではないのかもしれないです。それを言ったら、私なんて「53歳にもなってまだ仮面ライダーの映画をわざわざ見に行くんかい」という話なんですけど、私は仮面ライダーが好きで、その歴史を3歳からずっと見てきているんですが、ヒーローに対する価値観や考え方がすごく世相を反映していて、物すごく興味深いんです。

最新作は、ちょっとネタバレになるので詳しくは言えないんですけど、『バトルファミリア』というタイトルで、家族が一致団結、絆でもって悪と戦うというストーリーなんです。仮面ライダー一家が悪と戦うという形なんです。仮面ライダーのお母さんはすごい強くて、賢くて、勇気があって、優しく、明るくて、太陽のようなんです。それを見たときに私はげんなりしたというか、お母さんだって一人間だし、そんなにスーパーではいられないし、「お母さんにそこまで求めるって、何やねん」とか思って。「もうちょっと自分で自分のことを何とかしてくれや」みたいな気持ちになったというか、親子といえども、やっぱりまずは——もちろん、私は子どものことを生活の中で一番に考えていると思います。自然にそうになっていると思うんです。「子どものことを考えているよ」とかじゃなくて、自然にそうして守りながら生きていくと思うんですけど、だからといって、自分がそのときすごくしんどい、自分の状況も難しいときに、それでも母として「太陽のように明るく、笑顔でいながら」みたいなこと、「どんなことがあっても負けないし、泣かない」みたいなことは、私にはできないと思うんです。泣きたいときは泣きたいし、嫌なことは嫌と言いたいし、したくないことはしたくないと言いたいんですけど、そういうふうにして日本人の価値観の中に、家族という小さな、一番基本になる社会の中で完全に役割みたいなものを決めてしまっていて、それがちゃんとできない人は駄目だし、機能不全家族みたいなことを言われて。お母さんがちゃんとしていないとか両親がそろっていないと、うまく家族が家族として機能

していないみたいなことを言われちゃうのはちょっと違和感があって、家族であろうが、血縁であろうがなかろうが、隣人でも知り合いでも友達でも、困っている人やしんどい人がいたら「どうしたん？」とか「何か手を貸そうか？」と言い合える、それでもって人間はわざわざ、村というか、集団を築いて生きているんだと思うので、家族単位だけで完結しなければならなかったり、家族が完成していなければならぬというのはすごくプレッシャーだなというふうに感じましたね。家族といえども、関係性がいい家族ばかりじゃないと思うんですよ。私自身が特に家族の関係性にすごく悩んで大人になったので、家族よりかは身近にいてくれる友達に相談したことのほうが多かったんですね。助けてくれたのも他人の人だったりしたので。

そういうふうにして外にも視野を持てるような、自分一人でとか家族の中だけで生きていないということを——すごく自分が一人で、絶望感があったりするときでも、広い社会に目を向けると、どこか遠くのほうに助けてくれる人がいたり、話してくれる人が一人ぐらいはいるものなんですよ。だから、生きづらさを抱えたり、恐ろしいことが起きたり、何か絶望感を持ったときに、自分の周りだけ見ないで、遠くのほうも見渡したときに、周りの人の中に自分の思っていることを分かってくれたり、助けてくれたりする、分かち合える人がいるんじゃないかなというふうに感じます。

すごく難しいんですけど、社会から求められていることと自分がしたいことには必ずギャップがあるというか、社会から求められ

ていることと自分がしたいこととがうまく一致すれば、すごくラッキーというか、生きていきやすくなると思うんですが、多くの人は社会から求められることと自分がやりたいことに違いがあったり、もしくは、自分が得意なことを仕事にできたらいいけど、社会が求めてくることは自分の得意じゃないことだったりして、そういう自分発信のことと社会発信のこと、社会が求めていることが合わないというのはすごくしんどいなと思うんですよ。

では、実際それをどうやって合わせていくのかとなったら、やっぱりそこも具体的に解決策はないなと思うんですけど、できれば小さなときから、AかBかあったら、「どっちにする？」というのを親が選んで与えたり、周囲が決めるのではなくて、「間違ってもいいから自分で選ぶ」みたいなことを続けていっていると、恐らく「自分は社会からこう求められていても『いや、私がしたいことはこれだから』』というのを迷いなく選択していけるというか。

今まで私たちが育ってきた環境というのは、ほとんどが与えられて、それを受け入れて、それをうまくこなす。そして、それがちゃんとできたり、うまくこなせた人が良い子とされるという教育を受けながら育ってきているので、社会に出たときに自分の思いや自分の考えで「こうしたい」みたいなことを自信を持って出すことができなかったり、それがなかったりするんです。だから、「あなたらしくやればいいのよ」「自分らしくやってみて」「自分オリジナルで」とか言われても、その自分らしさとかオリジナルが何かも分からないという状態になってきてしまってい

るので、これからちょっと意識して、いつも自分で選んでみる。自分は何がしたいのかな、どんな生き方がしたいのかなど。何が好きとか嫌いとかだけでもいいんですよ。嫌悪する権利だってあるから、嫌いなものを嫌いと言ってもいいと思います。そういうところを一人一人が意識してやっていけたら、少しは何か変わってくるんじゃないかなど考えてます。

それと、最初にも言ったように、「生きる」とか「人間」というものに対して正解はないと思っているので、答え探しの旅をすることはすごくいいとは思ってます。でも、正解はないから、答えは自分の中にしかないという覚悟もしていけたら、助け合っってその覚悟をするところまでみんなで行けたらいいなというふうに思ってます。

多分、時間的にこれぐらいだと思うんですけど、藤井さんのお話を聞いて感銘を受けてしまったあまり、自分の話すことが結構飛んでしまって、めちゃくちゃな順番で話をしています。これで終わらせていただきます。

○上田 洋平さん

はい、ありがとうございます。ミウラさんも日々子どもたちや若い人たちと向き合う中での現場のお話でした。

毎日、もう本当に信じられないようなニュースとか——それは海の向こうもそうですし、国内でもそうですが、目を疑うような恐ろしい出来事をリアルタイムでその現場から我々個人個人が受け取るような時代になってきてしまって、それ自体がもうつらいというか、そういう洪水に今さらされているわけですね。でも、一方で、そこに何か関われ

るのかというと、手も足も出ずに立ちすくんでいるというような状況。あるいは、そういう中でようよう肩を貸し合っって何とか隣の人たちと立っているような、非常にそういう殺伐とした空気の中でようやく立っているような思いがするということ。

それから、優生思想というか、藤井さんがおっしゃったように、どうしても宿命的に私たちの中にも少なからずそういう部分がある。かつては法律としてあって、それはもうやめにしたはずなのに別の形でさらに強まっているのではないかと。

あるいは、昨日まで普通の人——普通という、またこれが後での話題ですが、普通シンドロームみたいなことですが、同じだと思っていたような人がばあっと有名になったり、炎上したり、もてはやされたりということも含めて、超人的な活躍をし始めたりするというようなことが隣にある状況。まあ、それはSNSのよいところ、あるいは課題なのかもしれませんが、そういう状況が実際に情報化の中で起こっているのかもしれない。

あるいは、無理ゲー社会。これに関連させると「親ガチャ」なんてことが最近よく言われていますが、社会の基層にあるのがゲームのメタファーというか、例え話で語られるようになってきてますね。

これは以前もどこかでお話したかもしれませんが、誰かが書いてたんですが、かつては疲れたというときは「ガス欠になった」と言ったらいいんですよ。これは車の工業社会のときです。「ガス欠になったし、ちょっと燃料入れてくるわ」と。ところが、今は「充電してくる」と言うわけですよ。それが今は「親ガチャ」とか「ゲーム」「無理ゲー」み

たいになって、社会の基層、社会を思い描くときのメタファーというのも時代時代が変わってきていて、何となくゲームみたいな。そうすると、ゲームでアイテムを手に入れてどんどん力を身につけていくというような、こういうのがどこかに——ゲームが悪いというわけじゃないんですよ。社会的にみんなが分かり合えるという基層がそういうふうになっているのかもしれないですね。そういうことも感じました。

あるいは、「多様性、多様性」と言うのではなく「存在そのものがすばらしい」と本当に心から言い合えることとか、仮面ライダーの歴史ね。別のところでは昔のような勧善懲悪から悩み悩むヒーローという像になってきたという話は聞いていて、いい傾向かなと思ってたんです。善悪がはっきりしないというようなパターンに仮面ライダーもなってきたと聞いていましたけれど、今、ファミリア、こんなことが出ているんですね。そうすると、家族の、あるいは親子・夫婦関係のおりに閉じない、逆にその圧力が高まってきているのかもしれないということを感じたりしました。

柳田國男という民俗学者は、「子育てを家族で行うという考え方は、もともと日本にはなかったんだ」と、こんなことを言っているんですね。実は、家族で子育てをするというのは意外と新しいのかもしれない、日本では。もっと広い社会で、よくも悪くも氏子みたいな、「村の子ども」というような中で育ってきたのが、近代になって急に「家族」となっているんじゃないかと。だから伝統とか家族というのもちよっと変わってきていて、むしろその圧力が強まっているのかもな、

なんてことも感じましたね。

今の教育なんかもそうですね。選択をする、自分で選ぶということですが、選んでいるようで、コマーシャルなどで、買い物から、教育から、全部何か与えられたものを選択している。あるいは、できたということは、あらかじめ「できた」という形が与えられていて、それに向かってつくっていくとか、「できたをつくる」ことが選べないとか、完成の形を選ばずに「この完成に」というのが既に与えられているとか、選択しているようで実は何か縛られている部分があるんじゃないかと。でも、自分で選ぶということもですが、それは結構難しいだろうなど。それを支えるためにはどうしたらいいんだろうかというようなこととか、そんなことを感じたわけです。

いろいろなことを視聴者の方も感じておられると思いますが、まず、今お話を聞き合っていたいただいて、藤井さんから、改めてここをちょっと突っ込んでみたいとか聞いてみたいなどいうところがあれば、お願いできますか。

○藤井 美和さん

突っ込んでみたいところはないのですが、「ああ、そうだな」と思って聞かせていただいたのは、優生保護法という公のもの、国が指導するものというのとはなくなったけれども、個人の中で優生的考えが大きくなっていること、それはまさにそのとおりで、今「新優生思想」とか「内なる優生思想」と言われているものですよ。結局、国が公に謳わなくても、やはり私たちの中にはそういうものがあります。内なる優生思想は悪い

ものなのか、という、今はもういろんな生命倫理学が出てきて、「命の質には差がある」というものもあるのです。例えばピーター・シンガーという人は「そもそも命の質には差があるんだから、質の高い人だけが生まれてきたらいい」と。そういう倫理学まで出てきています。そういう意味では多様なんだと思うんですね。

「じゃあ、『命の質に差がある』と誰が言うのか」といったときに、やっぱり私たちがかけている眼鏡—何かができる、できないという眼鏡—で見るから、差があるという考えが出てくるのだと思います。「そもそも人間の存在価値を、生まれてきている人間が決められるのか」というところに私はいつも疑問に感じます。生まれてきているのに、そこで自分がいろんな差をつくっていく。

例えば、先ほどのお話の中にあつた、障害の子どもは要らないということ。もちろん、そんな簡単に決断されてないと思います。本当に苦しい選択をされているとは思いますが。けれども、最終的に要らないとなった。そしてその方の人生は続いていきますよね。高齢になって、障害を持って、多くの人はある程度の認知症になって亡くなっていくわけですけど、そうすると最後は、「そんな自分も要らない」になりますよね。

ですから、私は、人間の持っている眼鏡を人間の中で閉じ込める—さっき、家族の中に閉じ込めるとおっしゃいましたが、人間の中に閉じ込めると、どうしたって、もうそれしか出てこないんじゃないかと思うんですね。

前の死生懇話会のときにお話ししたかも知れませんが、私が学生時代のときは必須

科目に哲学や宗教学が入ってたんですよ。でも、今はないんですね。必須科目でもない。しかも理系がすごく重要視されるようになって、国の研究費とか教育費も実証主義的な理系にどんどん配分されます。「これが分かればこうなる」みたいな、原因・結果のところに国も世界も価値を置いて動いていて、「人は死ぬのになぜ生きるのか」とか「なぜ人は苦しむのか」、「なぜ人は生まれるのか」、「死んだらどうなるの」みたいな議論はすこーんと抜けています、私たち人間なのに。優生思想的な考えは、人間の生命をモノ化してあるので、すごく入りやすい、分かりやすいですね。モノだったら、やっぱり品質の高いほうがいい、それははっきりしてますもんね。

そして人の選別においては、脳みその働きに大きな比重が置かれています。でも、人間って、そもそも脳みそだけで生きているわけじゃないですよ。全存在、「全人」として生きています。身体も脳みそも、それから魂も、みんな含めて生きているのに、魂とか実存性といった議論がまったくなくなってしまって、人が、堂々と「この人、質が高い、低い」なんてことを言うようになっていきます。そして、「そりゃ、そうだね」と簡単に同意されるようになってきているように思います。

それともう一つ、お話を聞いて思ったのは、家族だけじゃなくて、外の人と話をするというところもすごく大切だと思いました。

実は、私、学生から、「深い話をする会をつくってくれ」って言われているんですね。「それ、何？」と言ったら、「先生、それは生きることとか死ぬことじゃないですか」と言うんですよ。「苦しいということが言えない、

話せない」と言うんですね。友達は楽しいことを共有する人で、苦しいとか生きづらいなんて言ったら、みんな引いちゃうと。おそらく、みんな同じような苦しみを持っているんです。でも、言えない、言ったら、引かれちゃって話にならないし、「無理、無理」とか言われて、友人関係がダメになるんじゃないかと思うから。友達は楽しいことを一緒に共有する人。だから、苦しいことを話す場をつくってほしいと言うんですね。「ああ、なるほどなあ」と思って。若い人はやっぱり言いにくい。若い人と言いましたが、若い人だけじゃないですね、高齢者も同じだと思います。生きにくさ、生きづらさは、歳をとったら言う権利もない、そんな風潮があると思うんです。「若い人はこれからの人、あなたたちは去る人」みたいなね。いや、そうじゃないと。自分のしんどさや生きづらさをオープンにすること、それが社会に問題提起していくことになると思います。先ほどミウラさんがおっしゃってたように、閉じられていると、そこで終わっちゃう。でもオープンにすることで何か違う——さっきのこれ(穴を開けて外の世界を見る)ですよ。どこかに突き抜ける、そのためには生きづらさを共有する場をあちこちでつくっていく、それが重要なことじゃないかなと思いました。

○上田 洋平さん

ミウラさん、今のお話を聞いていらっやって、どうですか。若い人たち、子どもたちと日々過酷な現場も含めて関わっていらっやると思うんですが、深い話とか「楽しいことは友達と」というのは。テレビ番組でもありましたね。1分間で話をして、それが深

いか浅いかを比べるみたいな。その深い話なんていうところからどうですか。

○ミウラ ユウさん

どんなふうに話を聞くかとか、どんなふう
に話をするかまでも、「こういうのがいい」と
か、何か正解が決まっているというか、空気
を読めないと駄目みたいなことになっちゃっ
ているのも本当に息苦しいと思うんです
よ。自分が言いたいタイミングで目の前に
いる人と言いたいことを話せたらいいなと
思うんです。わきまえたり、節度を持ったり
することはある一定社会を円滑に動かすた
めには必要なことではあるんですが、せつ
かく友達なんだったら、どう思われるかとか
ばかり考えないで、自分が今困っている
ことや、つまづいていることを話してみる。
それを話されたほうも、受け止められない
ような話だったら、「私、それは聞きたくない」
と言ってもいいし、「そんな話は無理」と言
ってもいいけど、言うまでもなく、もう最初
からわきまえて「友達にはこんな話はしない
んだ」みたいなことを思わないといけないこ
と自体がしんどいなと感じますよね。

多分、それは本当にちっちゃいときから
——まず中学受験をする小学生だったら、
クラスメイトよりも上に行かないと駄目だっ
たり、勝たないと駄目じゃないですか。だか
ら、心が育つまでに受験のテクニックだっ
たり、勉強の仕方みたいなことを覚えて、その
先にあることは、友達よりもいい学校に入
れたとか、クラスメイトよりも上に行けたと
か。そういう結果を見据えての行動だっ
りするので、単純に心が育つ間がないとい
うふうを感じるんです。心を育ててもらう時

間がない。それなのに、わきまえるとか節度を保つとか、マナーばかり先に覚えさせられちゃうから、肝心なことをせっかくの友達に言えないということが起きちゃうんじゃないかなと思います。

○上田 洋平さん

なるほど。

ニュースなんかの話題で、最近はみんなの前で褒められたくないとかね。私なんかでも大学で教師をしていると、「あなた、すばらしいよね」なんて学生たちを褒めたいと思うんだけど、それはやめてくださいと。みんなの前で目立ちたくないというところもあるのかなというふうにも思いますよね。

今、お互いお話しされてみて、ミウラさんから藤井さんに聞いてみたいこととかありますか。

○ミウラ ユウさん

藤井先生は大学の先生なので、まさしく学生たちと日々奮闘されていると思うんですけど、度々思うのは教育の問題。変えなれないといけないところに来ていることは分かっているけど、一体どうやったら今の社会にフィットするような形に変えていけるのか。教育の世界こそがすごく閉ざされている世界で、外部から見たときに全然どうなっているのかが分からないということがすごく多いんですけど、これはどうやったらオープンにできて、いいふうに教育を変えていけると思われますか。

○上田 洋平さん

そうですね。藤井先生も当初の頃から教

育というところが非常に重要だとおっしゃっていました。今日も、選択と言うけれども、あらかじめ正解が示された中での選択だと。これは根本的に教育も変わっていかないとと思うんですが、藤井さん、どうでしょうかね。

○藤井 美和さん

難しいですね、カリキュラムって。学生は、大学に来たときに既にそういう頭になっていますから、大学に入ってきて「生きている意味がない」とか「ここでもう終わっちゃった」という人たちは結構たくさんいますね。

今の小中高の教育——形の上では整っていると思います、日本の教育は。でも、その中身が本当に人間が生きるために必要な力を涵養するようなプログラムになっているのか、また、教える側の人間教育みたいなものがあるのかなと、いつも思います。

これも以前の死生懇話会のどこかでお話ししたかもしれませんが、私は以前、兵庫県教育委員会と『「命の大切さ」を実感させる教育プログラム』の策定に、教育委員会の方々、兵庫教育大の先生、もう今は天国へ逝かれましたけど、日野原先生や現場の先生方と一緒に関わったことがあります。教案をつくって——ワークショップが多いんですけども——それを通して子どもたちが命を実感できるように、命を大切にするように、という目的だったんですね。カリキュラムは今でもホームページで見ることができます。当初から多少疑問はありました、マニュアル作って命の教育ができるのかな、と。県立の小中高校でそのプログラムを先生方が実施されていたのですが、こ

のプロジェクトの最後の委員会で、こういう話が出ました。プログラムを実施して表面的には、いえ、実質的にも子どもたちは、ある程度命のことを考える機会はできた。でも、これでいいのか、という疑問です。何が、これでいいのか、なのかというと、マニュアル化というか教案が出来ると、先生方はそれをその通りやることを考えるんですね。でも、子どもは、率直に、いろいろ質問してきます。「先生、何で生きてんの?」とか「僕、死にたいと思ことある、あかんの?」とか「誰々ちゃんは何で死んだの?」とか「親が自殺したら駄目なの?」とか。命の教育の中では、「なぜ生きるのか」とか「死んだらいけないのか」といった命に関わるような問いが出てくるのは、ある意味当然です。子どもは素直だから、ぼんぼと。特に低学年の子どもは聞いてきます。それに教員が答えられない、そういうことが分かってきたのです。

つまり、マニュアルとかワークショップとか、小中高でやってみたところで、本当に必要なのは、教える側がどんな死生観を持っているか、いのちをどう捉えているかです。それがないと子どもの質問に答えられない、命の教育にならないということです。教員は人を育てる、特に小中の義務教育において教員は人を育てる専門職です。それは技術だけで出来ることじゃないと思うんですね。人を育てる。「人間とは何か」みたいな、そういう死生観みたいところを深めていかないといけない。教える側はマニュアルをやればそれでいい、というのではないということが分かってきたのです。それで、最後の委員会で委員長が、これまでプログラムを作ってきたけれども、命について語りかける

には、プログラム重視でなく、思想や宗教性にも目を向けることが大切。それは、特定の宗教を伝道したり道徳の押し付けではなく、例えば、イエスやブッダの言葉を取り上げたり、人のために生きた人、マザー・テレサ、ガンジーとか、そういう人たちは一体どうしてあのような生き方ができたのかという思想的、宗教的などところも含めて考える必要があるんじゃないかと。これはつまり、今ある世界がすべて、を超えることだと思います。「マニュアルで教育はできない」という話が最後の委員会でのもとめでした。議事録に載っていると思います。

○上田 洋平さん

なるほど。ありがとうございます。

チャットも来ていますのでそちらに振りたいと思うんですが、私から「例えばこんな実践をしています」ということだけちょっと紹介してから。

私どもの大学は、とにかく地域の人と出会ってもらおうということで、できるだけ、変なとか、いろいろな人をお招きして、こういうことで遊んだりしています。人生を折れ線グラフで書いてもらって、「こんなことがありました」というのを基に学生としゃべっていると。こんなことをしてますと、ほとんどの学生が中高生の時代に大きな深い谷を迎えるわけです。人生で落ち込んでいく。受験の谷というのがあるんですね。ところが、経験を積んだ社会人の方々とやっていると、「パンツのゴムひも理論」と言ってますが、「長い経験をしていくと、そんな谷は、へでもないよ。もっと深い切れ目がこの後来るんだから」みたいな。こういう話をしてい

ると、「ああ、こんなふうに住きたい」あるいは「こんなふうでも生きられるのか」と。ガンジーさんとか、そんなすごい偉人じゃなくても、隣の人とまずそういうことを交換するという出会いを通じて「ああ、隣の人とこういう話をもっともっとできたらいいな」なんてことも考えたりはするところですよ。

じゃあ、事務局のほうからチャットを紹介していただきたいと思います。今、出席者を見ていると「三日月」という名前があります。この名前はなかなかないので、多分あの方だと思います。せっかくだし、最後のほうでちょっと一言いただきたいと思いますが、時間の限り、紹介いただけますか。

「生きづらさをつくっているのは何か」と知事が書いてくれたので、皆さんもチャットに書いてみてください。

○事務局(滋賀県企画調整課 森)

チャットをいただいておりますので、順番に御紹介させていただきます。

「ありのままとその人らしさが違うということは思ったことがなく、気づきでした」。それから、「与えられたものを受け入れて、それをこなすという教育。そのとおりでと思う。自分で選択することに慣れていない。」というお話。それから、「小さい時から親が大人が決めてしまっている」というコメント。それから、「自分にとって、何が大切なのか見つけることが難しくなっていると思いました。」というお声もありました。それから、「ありのままに受け入れるのは難しい。」「善く生きようとすればありのままではない。」

○上田 洋平さん

ここですよ。これが永遠に繰り返すと。怠惰な私もありのままかもしれないし、無関心な私もありのままかもしれないんだけど、でも、それがありのままかという、そうでもないよな。ですよ。

○事務局(滋賀県企画調整課 森)

それから、「生きづらさ、つくっているのはわたし」「生きづらさ、つくっているのはわたしのまわり。わたしのまわりと比べるわたし。わたしのまわりと合わせるわたし。」「生きているから感じるつらさ。生きているからつらさを感じる。」というお話もいただいております。

○上田 洋平さん

最後のチャットは、お名前を見ていると、三日月さんという方なので、もしよかったら一言もらって、続いて「生きづらさをつくっているのは何だろう?」というようなことを皆さんからもぜひ一言この機会に入れていただいて、今後につなげていきたいと思えます。

ちょっとその前に、藤井さん、ありのままの私のところで、駄目な私あるいは悪い私もありのままみたいになると、ありのままの地獄、連鎖に陥っちゃうんじゃないかと。そこで「そうじゃないんじゃない?」という顔をしていらっしやっただけで、一言。

○藤井 美和さん

ええ、そうじゃないと思いますね。ありのままというのはそういう意味じゃなくて、「ある」、存在の「ある(在る)」ということです。

前もお話しましたが、私、バリバリ仕事をしているときに病気になって、息もできない、まばたきもできない、全身麻痺の状態になって管がつけられたとき——それまで自分はいろんなことができると思ってました。傲慢にも。若いときは、大学を出て、自分の希望した会社に入って、それが世の中に役に立つと思ってたんです。でも、そうなったとき、何にも持たない存在になったのですよね、社会的地位もなければ、役にも立たない、体も動かない、全てのことを人に世話しってもらう。そのとき、自分の存在、「在る」ということが初めて自分の問題になりました。

私たちは、「何かができることに意味がある」という眼鏡を外さない限りは、「そこに在る」ということに気付かない——「こういう自分もあるがまま」というのも、それも偽物で、実は本当の自分は見えてないと思うんです。究極の苦しい状況になったときに「在ること」に意味があるのか、という問いが生まれ、意味がないんだったら死んでしまいたい、という苦しみが出てくるので。

ですから、あるがままというのは、ここにある命、魂とでもいうんでしょうか、ここに在ることが何の理由もなくOKということ——なんていったらよいでしょうか、私たちは時代を選んだり、家族を選んだり、民族を選んで生まれてきているわけじゃないですよ。ね。「今、なぜかここに在る」ということ、そこに目を向けるという意味での「ありのまま」であって、「怠惰な私も、無関心な私も、これが私のありのままです」というのとは違っていると考えています。

全身まひの私のお見舞いに来てくださった人がたくさんいましたが、その方が本当

に私のことを思って来てくれているのか、「お見舞いに行っとかなあかな」という気持ちで来られているのかというのが、不思議と分かるんです。今は分からないかもしれないですけど。その時の私にはもう何もなくて、魂が丸裸、みたいな状態ですよ。ね。そうすると、来てくれる人が何を思って来ておられるのかが見えてしまう。そのとき、私が思ったのは、体のいい態度や慰めの言葉や、「こう言えば、この人は喜ぶだろう」なんていう仕掛けは何の助けにもならないということでした。一番多かったのは「藤井さんは死ぬほど仕事してたから、ちょっとお休みしなさいということでこういう病気になったんだから、ちょっと休んでね」と。8割の人はそう慰めてくれました。でもそれは、その人にとっては意味のある答えでも、私は「ちょっとお休みするためにこんな病気になるなんて納得できないわ」となります。

むしろ私の心に響いたのは、入り口に立って入ってこられない方。私の通っている教会の牧師先生だったのですが、おそらく、「あの元気だった藤井さんがこんなことになっている」と驚き、何の言葉もなかったのでしょう。うつむいて泣いておられたんですね。それが私にとってはものすごく心に響きました。また、あるナースの方は「藤井さん、つらいね」と一緒に泣いてくださって。その方は私がクリスチャンだと知ってたので、聖書の言葉で「藤井さん、弱いところに神様の力は表れるからね」と泣いてくださいました。同じ病室の方でご自身も重症の方が、やっとの思いで車椅子で私のベッドサイドまで来て、手鏡で外の景色を見せてくださったこともありました。

いわゆる、「何かができる」じゃなくて、自分の無力を引き受けて、なお「この人のことが気になるから、ここにおらせてもらってもいいですか」と、苦しむ人に響くのは、そういう態度だと思うんです。私たちは、生きづらい人に何かしようと思うと、「何かできる自分でなければならない」と思いますよね。そこにまた、さっきの眼鏡が出てくるわけです。「自分は、役に立つ人間じゃないといけない」という。いや、無力でいい、と思うんです。言うならば、無力を引き受ける勇気みたいな。無力である自分をどこかに預けて、それでも押し出されるという、それが必要なことじゃないかなと思うんですね。

結局、「助けてあげましょう」「何かしましょう」と、まさに苦しみの中にいる人に、上から目線で「できる私」を持ちだしたら、それはもう何の助けにもならないですよ。むしろ何もできない「ありのまま」でいいと思うんです。「何にもできません。でも、あなたのことが気になるから、お役には立てないけど、お邪魔かもしれないけど、そばにおらせてもらっていいでしょうか」という、これだと思うんですよね。私たち、あまりにもできることにとらわれ過ぎているような気がします。

○上田 洋平さん

なるほど。いよいよここからという感じのキーワードが出てきましたよね。自分の無力を引き受け、その引き受ける覚悟を持って、あるいは自分には何もできないという無力を引き受けつつも、「それでもこの人のために」「何か気になってしょうがない」。これは多分ミウラさんも非常に共感できる場所があると思います。

それから、チャットでは「自分の中の『思い込みの壁』を越えると、少し生きやすくなるように思います」ということも言っていただいていますし、「生きづらさが関係性の産物であれば、生きづらさは無限大に拡大する訳ではない。関係性のリシャッフル、関係性は案外脆弱であることに気が付くこと。」と。その関係性が絶対のものと思わないで、一度ほどいて結び直すなんてことも逆にできるんじゃないかということに気づくことが大事ということですよ。

それでは、三日月さんにも投稿していただいていますし、3期目は子どもを中心にとりょうなこともおっしゃっていただいているように聞いていますので、その辺も含めて、今日聞いていただいた感想を伺いたいと思います。

○三日月 大造



藤井さんやミウラさんのお話を聞いて、感じる、考えることがたくさんあって、出ようかなと思ったけど、ありのまま出るのが難しい状況だったので、すみません、急いで帽子をかぶって、ひげをそって出てきたという状況です。

今日はプライベートな用事をしてまして、

ただ、このトークイベントだけはぜひ聞きたいなということで参加させていただいて、とてもよかったと思っています。

私、「『健康しが』をみんなでつくろう」ということで、知事として「人の健康」「社会の健康」「自然の健康」を高めて保ちませんかと言って歩いているんです。先月から選挙でもずっとそうやって言って歩いてきました。前も言ったかもしれませんが、「今ちょっと病気を抱えてて」とか「この先そんなに長く続くと見えなくて」「障害もあるので」「障害の息子や娘がいるので、こんな私は知事の言う『健康しが』に入れますか」という問いかけがグサッと刺さったことがあります。先ほど藤井さんは「眼鏡」と言われましたし、ミウラさんはいろんな思想とか思い込みとか、そういう言葉でも表現されてましたけど、物差しみたいなものをこちら側から押しつけるとか「こうでないといけない」と決めつけるとか、そういうことじゃない言い方とかやり方を知事とか行政というのは特にやらなきゃいけないんじゃないのかなと最近強く思い始めてます。

その意味で言うと、生きるとか死ぬというのは最もピュアな、最も素の部分であり、最も難しいものでもあるんですけど、こういうものから解きほぐしていくとか、考え直していくということが大事なんだなと今日改めて感じました。

また、委員の皆さんが少し長めに話していただくというのは、どんどん掘れる、掘れると言ったら失礼ですけど、深さとか広さとか、いろんな引き出しを共有させていただけるので、これも何かいいなと思わせていただきました。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。

もう残り時間がなくなってきました。私、下手くそで、毎回すいません。これだけ用意しても、やっぱりしゃべり足りないということになってしまいます。

チャットでは、最後に「今の世の中は、以前に比べて確かに生きづらいと思います。しかし、生きづらさを感じる人は、その考えの前提に、死の世界は豊かで素晴らしいものがあると思われてるのではないのでしょうか。」と。今がつらいから、あの世というのが出てきたというようなこともあるのかもしれませんがね。「小生は、死の世界の天国や地獄は、色がなく、つまらないと思っています。そう考える根拠ははっきりしないのですが、何となくそのように思います。皆さんどう思われますか。」なんて、こういう面白そうなテーマのチャットがたくさん来ているんですが、時間が来ておりますので、一言ずつ、30秒ずつぐらい、藤井さんとミウラさんにお話しいただきたいと思います。

では、ミウラさんからお願いします。

○ミウラ ユウさん

今日は、土曜日のお休みのところ、皆さん、お話を聞きに来てくださってありがとうございます。前期から続いて第2期にも委員に選んでいただいて、何の肩書きもなく、何の資格もないただの隣のおばはんなのに、こんなふうに呼んでいただけたこと、本当にありがとうございます。

疑問に思うこととか、しんどいなと思ってることとか楽しいなと思っていることを何でもざっくばらんに公の場で話すことがで

きるというこの機会はずばらしいと思うので、ぜひ続けていていただけたらなと。私もできる限り協力したいと思います。

今日はありがとうございました。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。

藤井さん、お願いします。

○藤井 美和さん

ミウラさん、肩書きとか、それぞれ邪魔もの。私もただのおばさんですからね(笑)。

今日のご高齢の方も来られていると伺ったんですけど、最後に一つだけ、トルンスタムという人の「老年的超越」というのをシェアしたいと思います。

私たちの眼鏡、私は「こうあるべき病」とよく言うんですけど、それがどれほど歪んでいるか、というお話です。ある高齢者の施設で「さあさあ、デイのプログラムです」と誘っても行かない人がいた場合、「この人、どうしちゃったのかしら。参加したら楽しいのに」とか、地域で集まっている会に来なくなった一人暮らしの方がいたら、「老人性鬱かしら。認知症が始まったのかしら」という眼鏡で見えちゃったりします。実はその人、「いやいや、そんな集まりに行くよりも、私は本当に親しい人と月に1回お茶を飲みながらお話しする豊かな時間が持てたら、それでいいんです」ということだったのですね。この例はトルンスタムの調査で明らかにされているんですけど、私たちは、「こういう人が健康」とか「こういう人が幸せ」という眼鏡でもって、人の豊かな人生にまで割り込んでいってるんですね、「プログラムに出

るべき」みたいに。この高齢者はこの世の楽しさなどを超越した世界、別の喜びの次元にいる、ということなのです。それは、子どもでも大人でも、みんな同じだと思います。私たちのとらわれの眼鏡を外して、「こうあるべき病」から解放されること。難しいですが、それに気がつくというのがスタートだと思います。

そういう意味で、死生懇話会というのはいろんな気づき——答えはないから、気づきの懇談会なんだと思うんですね。こういう機会を滋賀県がつくってくださって、知事さん、本当にありがとうございました。

○上田 洋平さん

はい、ありがとうございます。

まだまだこれからというところで終わりになるんですが、こういうのは「もうちょっと話したかったな」というところで終わるのがみそかもしれないですね(笑)。

ミウラさんにおっしゃっていただいたように、いろんな人が肩書を超えてこういう場で話せる、それが公にできる。こういう不安な時代ですから、場合によっては、それこそ、今、世情で話題になっているような危険なところに絡め取られるおそれもあるわけです。だけど、みんなでこうやって自由に話しましょうよということがもっとももっといろんなところに広がっていけば、そこに落ちないで、こちらでということも。それを率先してやっていることが重要かと思います。

やりながら気づいたんですが、チャットでいっぱいいただいていますし、事務局さんともまた相談して、こうやって話を聞いているだけじゃなくて、ブレイクアウトルームなん

かをつくったりして、終わってから「参加者みんなでもっと自由にしゃべりましょうよ」なんて時間も、ひよっとしたら、このZOOMを使うと、できるのかもしれませんが、もっともっとうこういう対話の機会を広げていけたらというふうに思いながら聞いておったところでもあります。

今日、いろんなキーワードが出ました。これをまた次回以降のこのリレートークで一リレーをして語っていくということです。今日はその第1回目で、重要なキーワードをいろいろお二人に出していただきまして、ありがとうございます。教育の問題とか、まだまだ深めたいところはありますが、お時間を過ぎておりますので、また不手際をお許しいただきたいと思います。

では、今日は長時間にわたって御視聴いただきまして、ありがとうございます。これで私の進行は終わらせていただきます。事務局にお返しします。

皆さん、お二人に拍手をお願いいたします。

○事務局(滋賀県企画調整課 山田)

御聴講の皆様、御出演の皆様、どうもありがとうございました。知事も急にお呼び出して出ていただきまして、ありがとうございました。

本日はこれでこのイベントを終了させていただきます。

最後に連絡事項として、先日URLを送付した際にアンケートの依頼も一緒にさせていただいてます。そちらの回答に御協力いただきますよう、お願いします。

次に、今、上田先生からもありましたよう

に、リレートークの第2弾を考えてまして、これを10月の中旬にしようと思っております。「暮らしの中に死の話を～死に寄り添う現場から～」というようなテーマで、死生懇話会委員である滋賀県医師会長の越智さん、滋賀県介護支援専門員連絡協議会副会長の楠神さん、看取り士として精力的に活動されている看取りステーション「たんぽぽ」滋賀所長の西河さんに御参加いただいて、またそちらも上田先生にファシリテーションしていただく予定です。

もう一つ、10月16日(土)に、新しい試みなんですが、デスカフェ「絵本読書会」というようなイベントを予定しております。またそちらのほうも、詳細が決まり次第、改めて御案内させていただきますので、ぜひ御参加いただければと思います。

それでは、本日の配信はここで終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。

[15時35分 閉会]

